

高大接続教育の実践デザインを考える

企画者： 谷口哲也（学校法人 河合塾）

話題提供者： 椋本洋（立命館大学）

成田秀夫（学校法人 河合塾）

内村浩（京都工芸繊維大学）

小林昭文（学校法人 河合塾）

司会者： 中井俊樹（名古屋大学 高等教育研究センター）

大学の大量化にしたがって直面している学力問題として、荒井は「高校教育と大学教育の間には溝（チャズム：chasm）があり、それをいかに飛び越えるか」（『学習指導要領 vs 大学入試』2011）を挙げている。

本企画では、溝（チャズム：chasm）を埋めるために、①高校数学と大学の初年次教育・数学をつなぐ試み、②高校教育での「探究」活動と大学教育をつなぐデザイン、③学びの接続の視点からの大学入試の実践事例を紹介する。しかし、一方で新学習指導要領の完全実施に伴い、徐々にではあるが、高校の授業方法の変革も進みつつある。そこで、④高校でのアクティブラーニングの広がり現状も報告しながら、高大接続教育のありかたを検討したい。

① 高校数学と初年次教育・数学をつなぐ「活用・探究」型学力を創る： 椋本洋（立命館大学）

高校教育と大学教育の溝を埋める努力を、大学は初年次教育で、高校は学習指導要領の改訂で行おうとしている。

新教育課程の学習指導要領は、従来からあった「習得型」の学習と「探究型」の学習が分断されていることを修正するために、「探究型」の学習のステップとして「活用力」の学習を挿入している。高校の指導要領に比較し、義務教育における「活用力」の育成にかかわる目標は、明確であり、その効果検証も学力状況調査において測定している。ただし、最近3年間の調査の（H23は除く）「基礎的・基本的な知識理解/活用」の正答率は、

(2012:66.1%/45.2%) , (14:63.3%/51.1%) , (15:64.3%/42.4%)

であり、その目標は、必ずしも成功しているとは言い難い。さらに、中央教育審議会の答申では「活用力」を設定しているのに対して、高等学校の数学の学習指導要領はやや後退し、新教科「数学活用」をおき、「数学I」および「数学A」に新しい章として「課題学習」を登場させたのに留まる。これでは、冒頭に述べた溝が埋めようがない。しかし、それは知識注入型の授業が多い高校現場の実態の反映でもある。

そこで、京都・大阪の有志の高校・大学の教員で研究を重ね、そうした高校現場でも実践しやすいように「活用力」の問題とその指導プランを作成した。これにより、高校数学の基礎基本をより確実な学力として定着させるとともに、最終的なゴールである「探究型」学力をつけるための懸け橋としたい。そして、それが大学数学への円滑な接続になることを期待している。

② 高校での「探究」活動と大学教育をつなぐ： 成田秀夫（河合塾）

新しい学習指導要領では、高校での知識の「習得」と「探究」をつなぐ知識の「活用」という考えが謳われた。こうした中等教育での変革は、「知識基盤社会」と呼ばれる現代社会の変化に対応したものであり、高等教育の変革と無縁ではなく、特に「探究」活動は大学での初年次教育に直結する内実をもっている。しかし、それらの重要性を高等教育の側ではあまり意識されておらず、また高校側も十全に「探究」活動を展開できていないというのが現状であろう。高大連携の内実を深めるために、高校での「探究」のエッセンスを理解する必要があるだろう。

高校での「探究」活動は、総合学習として行われているが、生徒が自らの興味・関心、問題意識にもとづいて行う活動である。「探究」活動では京都の堀川高校が有名であるが、いくつかの事例を教育する側から検討すると、①探究活動に必要なスキル（ジェネリックスキル）の養成、②生徒自らが問いをたてることの支援、③生徒が自らの活動を振り返り成長を確認することの支援、そしてさらに④生徒をうまく支援できるようにするための教員の支援が必要である。また、⑤「探究」活動をどのように評価するかということも重要な課題となっている。

③ 「学びの接続」の視点から、新しい試験をデザインする： 内村浩（京都工芸繊維大学）

新しい時代に求められる学力とは、次のようなものであろう。

- ①すでに学んできた知識のネットワークの中に、新しい知識を組み入れる。
- ②単一の正答を覚えるということよりも、知識を活用し、表現することが求められる。
- ③互いに学び合うためのコミュニケーション力も重要!

しかし、こうした学力は、従来型の試験ではほとんど測られてこなかった。このことが、高大の学びの接続を阻害する一因となっている。このような問題意識に基づいてデザインされた試験の事例として、京都工芸繊維大学のAO入試（ダビンチ入試）を紹介する。全学共通で行う一次試験では、生徒は高校でまだ習っていない内容の講義を聴いた後、上記①②の力を測るような試験を受ける。学科別で行う最終試験では、その学科で求められる主要能力を総合的かつストレートに測るような試験や、上記③のコミュニケーション力も測るようなユニークな試験が工夫されている。追跡調査の結果によると、ダビンチ入試のドロップアウト傾向の学生数は、一般入試の半数程度である。また、大学生活に対する満足度も高い。大学の学びのスタイルで入試を行うことにより、大学教育への適応力や意欲が高まることが期待される。

④ 高校でのアクティブラーニング型授業の広がりとその特徴： 小林昭文（河合塾）

公立高校で「アクティブラーニング型授業(以下、AL型授業)」としての物理科授業を開発・実践してきた。教員退職後は、高校や教育委員会主催のAL型授業に関する研修会講師を2013年度の1年間で、約50回担当した。その経験の中から、高校現場におけるAL型授業の広がり、その特徴などについて報告する。第1の特徴は2012年度から高校でのAL型授業実践者が急増している。授業中の「言語活動の重視」「思考力・判断力・表現力の育成」を掲げた新学習指導要領完全実施が、授業改善の取り組みを推進していると思われる。第2は進学校においても「これまでの授業の延長線上ではこれ以上のことはできない」という壁を感じているようで改革が始まっている。第3は地方、とくに人口の少ない地域での取り組みが始まっている。第4は教員組織が共同して授業開発している学校のほうが成功しやすい。これら4点の詳細について報告する。